

## 杏林散策

## 父の鞆

空知医師会 方波見 康 雄

父の愛用していた黒い鞆がある。往診鞆である。色も褪せ擦り切れてしまっているが、これといった財産を遺さなかった父の貴重な遺品である。

私も、父の代診役の往診に、この鞆を使ったことがある。父は折から体調を崩して臥せており、親交のあった92歳ぐらいの方の最後の看取りを、故里に戻ったばかりの若い私に託したのである。もう40年以上も前の冬の夜のことである。

かなり古いが立派な造作の農家のお宅を訪れると、ご家族に静かに囲まれて、いよいよ最期の時を迎えられていた。お元気なころはたぶん、がっしりとしていたであろう、大柄で骨太な、穏やかな大人（たいじん）の風貌をそなえた方であった。

こんどお帰りになった若先生ですよ、ご家族にそう紹介され、父からの伝言を私が述べると、かすかに頷かれた。ご家族も静かに耳を傾けていた。

父の厳しい指示があったので、最後の息を引き取られるまで側に付いていた。長老の死ともいうべき、本当に大往生であった。大学から戻ったばかりの私には、このような往診は初めての経験であった。

父に言われたとおりに、清拭と合掌を済ませての帰り、真っ白な雪道が、どこまでも果てしなく続いているような感じがした。夜空に満天の星が煌めき、月がピンネシリの雪嶺を蒼く淡く照らしていた。眼の前に見えるすべての光景の細部にまでなにもものが遍在しているように思えた。

風と雪にも樹木にも、その樹間の陰影にも、月影や星の瞬きにも、山嶺にも、時空と言葉の表現を超えたなにもものが存在している、真冬の夜そ

のものが遍き存在者である、そう強く感じた。

たったいま穏やかに最期の息を引き取られたばかりのご老人も、この遍在世界に帰られたのであろう。幽けく消えたその心音は、遙か天籟に帰したのであろう、冬銀河に瞬くどこかの星に住み着くことになるのであろう、とも思った。

父の鞆を見ると、もうとっくの昔みたいになった、この往診のことを思い出す。後年、がん末期の方々や高齢者の在宅ターミナルケアに深くかかわるようになったのは、このときの不思議とも言わべき冬の夜の体験と省察が、導きとなったのかも知れない。今にして改めてそう思う。

この後、父も死に、そして私自身がいま、それなりの病気の体験も経て、いつ死んでもおかしくない年齢になってしまっている。

果たして私は、あのとき強く印象づけられた遍在世界にたどり着けるのかと近ごろ思う。満天の星なんて、とても望めそうもない日本の夜空では、帰るところはないのではないかと訝る。

『智恵子抄』の智恵子は、東京に空はない、と悲しむ。東京どころか、いまのどこの都会にも空はない、とりわけ夜空がない。夜空のあのなんとも言えない黒暗暗の闇がない。煌々たるネオンが夜を奪っている、夜空にあるはずの星の輝きを遮っている。

夜は人を畏怖させる。敬虔にさせる。目に見えない、なにものかについて考えさせる。昼は人を外に向かわせるが、夜は内へと導く。内面化させて己と静かに対面させる。夜は、哲学者である。その夜という貴重な自然を失った歪みが、世相をさらに人工的に歪ませている。

この歪みは、日本のいたるところにまで及んでいる。それにつれて、あの悠揚とした大人（たい

じん)の死に方も静かな家族の姿も、この国からいつの間にか消え去ろうとしている。智恵子の悲しみは、ただの「あどけない話」に閉じ込められてしまっている。夜の喪失はまた、詩想と想像力の喪失でもある。

父が黒い鞆を抱え、迎いの馬櫓に乗り出かけた冬の日の往診姿が彷彿として目に浮かぶ。小さいときから、いつも見ていた姿である。請われるままに、夜遅くても、どこにでも往診をしていたのである。

かつては石狩川の川面は、冬ともなると氷で硬く覆われていたそうである。その氷原を馬櫓で渡り、対岸の浦臼の奥までも、往診をしていた話を、子どものころによく母から聞かされていた。

そのころに私とおなじように子どもだった人たちがいま、年老いて病気を患い、私の診療所にみえる。子どもながらに、深夜の往診はありがたく

て、ほっと安堵した記憶をいまだにお持ちの人がいる。診療を終えてから抱き上げてもらったという思い出を懐しく話してくださる人もいる。寡黙であった父の側面や、貧しかったが昼と夜とが自然のバランスを保ち、心も穏やかであった日本の旧き時代を垣間見る思いとなる。

父の開業医医療の良き伴侶であった黒い鞆はこうして、医療の原点から世相の変遷、人間存在の根源にいたるまでの、いろいろなことを、いまなお語りかけてくれている。もったも、いま残っている鞆は代替わりして最後のお務めをしたものである。それでも往時を偲ぶには十分である。

偲ぶ、つまり思い出すことは、死者への礼儀である。黒い鞆についての回想は、父と同時代を無名に生き、はるかに恵まれない地域で力を尽した先輩医療人への敬意をこめたレクイエムでもある。

## お知らせ

# 北海道医報投稿にあたって (お願い)

### ◇情報広報部◇

北海道医師会では、会員の皆様からの原稿を募集しております。下記の要領をご留意のうえ、ご投稿くださいますようお願い申し上げます。

#### 1. 原稿の締切

毎月1日発行：前月15日

#### 2. 原稿の体裁と字数制限

- (1) 原則として横書きといたします。
- (2) 引用文以外は、すべて当用漢字、現代かなづかいを使用してください。
- (3) 誤字、脱字等は情報広報部において訂正いたします。
- (4) 1回の掲載紙面は、原則として2頁を限度とします。

医報1頁は医報用原稿用紙(22字×11行)6枚、または市販原稿用紙(20字×20行)で約3枚半です。パソコン等を利用の場合は、1行の文字数を22字で設定してください。医報1頁は

60行となります。

また、長文原稿および連載物は、情報広報部にて採否決定の上で分割掲載、掲載号等を決めさせていただきます。

- (5) できるだけメールまたはフロッピーディスクでお寄せください。

#### 3. 原稿の採否決定

内容が掲載に支障があると判断した場合は、執筆者に訂正を求めるか、または掲載をお断りすることがあります。

#### 4. ホームページへの掲載

特にお申し出のないかぎりホームページに掲載されますので、予めご了承ください。

連絡先：北海道医師会事業第二課

TEL011-231-1725 FAX011-252-3233

E-mail : ihou@office.hokkaido.med.or.jp